

人生の意味と AI——「経験機械」と「塊」

蔵田伸雄 (Nobuo Kurata)

創価大学

近年の「人生の意味」に関する分析哲学的議論、すなわち「人生の意味の哲学」では、「無意味な生」の典型例としてしばしばカミュの「シーシュポス」、ノージックの「経験機械」、そしてウルフの「塊 (Blob)」が参照される。

このうちノージックの「経験機械」は、従来は快樂主義批判のための思考実験として理解されてきたが、近年では「どのような生が無意味とされるのか」を問う観点から、特に人生の意味に関する主観主義を批判するものとして再解釈されている。

しかし、VR 技術や生成 AI の発展により、「経験機械的状况」はもはや単なる思考実験にとどまらず、現実的な問題となりつつある。もし私たちが VR の世界に永続的に閉じこもるなら、それは「意味のない生」と見なされるかもしれない。だが、現実と仮想を自由に行き来でき、自らが VR 内にいることを自覚している限り、VR を一概に「悪」とみなす理由はない (Danaher)。また、映画や演劇の鑑賞が「無意味」でないと同様に、VR も使用の仕方次第で「意味ある経験」を提供しうるだろう。

とはいえ、インターネット上の娯楽や自己表現がウルフのいう「塊 (Blob)」的な生を助長している点にも注意が必要である。ソファに座ってビールを片手に Netflix や YouTube を延々と視聴し続ける生活は、社会的貢献などの客観的価値を欠いた「無意味な生」とみなされうる。

また、SNS 上で承認を得るために「充実した自分」を演出する行為は、「真の自己 (authenticity)」の喪失を招く危険をはらむ。その一方で、AI が人を「真の自己探求」へと神経症的に駆り立て、自己改善をめぐる情報の氾濫がかえって疎外を生む可能性も指摘されている (Coeckelbergh)。加えて、ズボフのいう「監視 (サーベイランス) 資本主義」のもとで、私たちのネット上の行動は GAFAM によってサーベイされ、購買行動も「あなたへのおすすめ」によって操作されている。

こうした状況の中で、生成 AI (LLM) の存在は、「私の生には意味がある」という感覚や判断をさらに揺さぶっている。高度な疑似人格 AI でなくとも、日常的に利用される生成 AI は、使用者の関心や思考傾向を学習し、あたかも「私を理解してくれる存在」として応答する。その結果、AI とのあいだに擬似的な親密さや共感が生じることもある。しかし、そのような「関係」が真に意味あるものといえるのか、それとも自己閉鎖的な快樂にすぎないのか、改めて問われなければならない。

VR、生成 AI、SNS といった新しいテクノロジーは、「人生の意味」の有意味性を高めることもあれば、損なうこともある。「人生の意味の哲学」は、抽象的な思考実験の次元を超え、現代のデジタル環境の中で、どのような生が「意味ある生」たりうるのかを具体的に問う段

階に達している。

Danaher,J. (2022), “Virtual Reality and the Meaning of Life”, in Iddo Landau(ed), *The Oxford Handbook of Meaning in Life*.2022,Oxford University Press

Coeckelbergh, M. (2022). *Self-IMPROVEMENT. Technologies of the Soul in the Age of Artificial Intelligence*, Columbia University Press. (邦訳 マーク・クーケルバーク 著,田畑暁生 訳(2022)『自己啓発の罠 -AIに心を支配されないために-』青土社)

Wolf,S. (2010).*The Meanings of Life and Why it Matters*.Princeton Universe Press

Zuboff,S. (2015), “Big other: surveillance capitalism and the prospects of an informal civilization”, *Information Technology* (1) , pp.75-89.

Zuboff,S. (2019), *The Age of Surveillance Capitalism: The Fight for a Human Future at the New Frontier of Power*, PublicAffairs